

## 詩作に対して思惟とはなんであるのか？

関口 浩

ハイデガーがヘルダーリンの詩作に本格的に取り組んだのは、おそらく 1930 年代の初頭であったろう。彼がこの詩人についての解釈をはじめて発表したのは、周知のように、1934 年冬学期のフライブルクでの講義においてであった。

ヘルダーリンは、ハイデガーの前に、神々の不在を根本的に経験し、そして将来における聖なるものの到来を予感し、それを詩作した詩人として現れてくる。ヘルダーリンは自分の思惟すべきことを先んじてすでに詩作している、とハイデガーには感じられた。ハイデガーの〈思惟の道〉において、遅くとも 1930 年代初頭以後、ヘルダーリンは、彼の前方から到来して、その進路を導くものとなったということができよう。現に、ハイデガーはその晩年に次のように言っている。「自分の哲学はヘルダーリンの詩作を可能にするもの以外のなにものでもない」。

ヘルダーリンの詩作と取り組むにしたがって、ハイデガーの思惟に詩作的性格が目立ってくる。思惟の術語にヘルダーリンの詩作に由来する語彙が数多く採用されるようになる。その文体も、外見上、きわめて詩的に見えるものが書かれるようになる。たとえば、全集第 13 巻に収録されている「諸々の目配せ [Winke]」（1941 年）と「思惟の経験から」（1947 年）、全集第 81 巻に収録されている「ゲダハテス [Gedachtes]」（1945-46 年, 1972-75 年）などである。これらの作品集には、行ごとのシラブル数がそろえられ、押韻された作品が数多く見られるのである。

詩作も思惟も、同じようにことさらに言葉とかかわり、同じように〈存在〉に根ざしている。すると、詩作と思惟とはいったいどこが違うのか。ハイデガーは詩人と思惟者についてヘルダーリンの詩句を借りて「もっとも離れた山上に近く住んでいる」という。両者の隔たりはどういう点にあるのか。

ハイデガーはヘルダーリンとの対話をつうじて、詩作に対して思惟とはなんであるのか、なんであらねばならないのか、思惟の本質はどこにあるのか、という問題に答えねばならなかったのではないか。しかし、ハイデガー自身はこの点について明確に論述してはいない（「思惟と詩作」と題された講義が 1941 年と 42 年の冬学期に予定されたが、第一講が行われたのみで中断された）。本発表では、この問題について検討したいと思う。

詩作に対して思惟とはなんであるのか、この問題を考えるにあたって、「諸々の目配せ」と「ゲダハテス」とにハイデガーが加えているコメントが手がかりとなる。一見詩作とも思えるこれらの作品であるが、ハイデガーはそれらを思惟作品であるという。それという

のは、それらが **bildlos** であるから、というのである。**Bild** すなわち、像、あるいは形象の有無が、詩作と思惟との相違のメルクマールとされるのである。

これにしたがえば、詩作は **bildlich** すなわち、像あるいは形象をもちいた言語による作品ということになるだろう。詩作はそのようにして〈象徴 [Sinnbild]〉による表現であると見なされる。たとえば、ヘルダーリンの詩作に書かれているライン河は、まず感性的なものであって、それがさらに非感性的なもの——内容あるいは意味——を象徴している、というように考えられるだろう。

象徴は、感性的なものと非感性的なものとの区別にもとづいて作られるが、この区別はプラトンの思惟においてはじめて生じたものである。西洋における芸術解釈はすべてこのプラトンの思惟を基盤として成り立っている。寓意、象徴、直喩、隠喩などといった詩学における諸々の伝統的概念も、すべてこの区別にもとづいているのである。

だが、ヘルダーリンはこうした古代ギリシア以来の詩学的伝統にはもはや属すことのない詩人なのである。これこそがハイデガーの発見だった。ヘルダーリンはある友人に宛てた書簡の一節でこう述べている。「思うに、われわれはわれわれの時代に至るまでの詩人たちを注釈しないだろう。総じて歌い方は別の性格をもつだろう。」ヘルダーリンの詩作には本質上もはや象徴はもちいられてはおらず、そのような意味での **Bild** はないのである。

ハイデガーは **Bild** という語をプラトンの区別における感性的なものとして用いているのではない。したがって、彼の思惟が **bildlos** であるといっても、それはプラトンの区別における非感性的なものであるということ、すなわち抽象的なものであるとか、観念的なものであるとか、精神的なものであるということではない。

では、あらためて、思惟が **bildlos** であるとはどういうことなのか。**Bild** がそのような感性的なものではないとすると、それはどのようなものなのか。

さらには、そもそも詩作的な言うことと思惟的な言うこととの間の差違は、原初的には、いかなる事態に由来するのだろうか。